

なぜウリ△WRIVか……

向井 亨

1 そのときではまにあわない

かつての戦争をふりかえってみて、いまぼくが一番伝えたいことを言えば、こういうことになる。

―もし君が反戦を言い、どんなときもそれをつらぬこうと決意しているとしたら、

「戦争は悪だ。悲惨なものだ」

「人を殺すのも、殺されるのもイヤだ」

という、しごくあたりまえの感覚と論理だけでは、決して充分ではない。

なぜなら一夜明けて戦争が始まると、昨日までのことがウソのように一変する。戦争は悪であるどころか、悪を討つ正義であり、抑圧から人々を解放し、自由を回復させるための―やむにやまれぬ―ものとなる。まわりの人ひとりのこらずが、そのことを口にし、叫び、心か

ら信じ、熱狂的愛国者にかわる。とくに男たちは、進んで戦場に身を挺するようになる。

その時もう「戦争は悪だ」という論理は、一片の力にもならず、自分をささえる役にも立たない。

戦争が起ってしまったら、とても尋常なことでは抵抗なんて考えられない。必ずそうなる。―そのことをまず肝に銘じて心得ておくこと―それがいま反戦を考えるときの前提だ。―

これを聞いて、A君は、すこしふんがいき味な口調でこういった。

「もし戦争がおきて、兵隊にとられるという事態になったら、ぼくは山奥へ逃げる。徴兵を絶対に拒否する。しかしにその決心は、いま固いものだろう。だが、いざというときにその決意を実行できるのは、何百万に一

人の可能性でしかないこともたしかである。

だからA君がいま、すでに山奥にかくれ場所をつくりそこに何年分かのカンズメと生活用品をそなえ、いままぐにでも親子親族友人の縁をたつて、一人ぼっちの孤独に耐える準備ができている——というならばともかく、「戦争がおこったら——」ということで、それを明日、あさってのことと考えているなら、きっと決心だおれになつてしまふにちがいない。

戦争がはじまったら、そのとき実はすべてが終っている。憲兵や警官だけが追うのではない。山へ逃げれば村人総出の山狩りに狩り立てられる。すれちがった猟師からも密告される。非国民、売国奴、卑怯者、スパイ、犯罪人としてのあらゆるレッテルがはられ、誰一人味方してくる者はいない。かりに心の中で助けたいと思つていても、助けられない。当人だけでなく家族や親戚たちも「国賊の一味」として白眼視され、迫害される。

とすれば今から蒸発して、一人ぼっちで逃走をやりとおす準備をしている位でなければ、そのときもう身動きもならないことになる。

ところが実際の問題としていま、そんなことができるだろうか。とてもむずかしく、また非現実的なことでも

ある。

ではどうしたらよいのか。ぼくの経験では、そのときでは、もう、どうしようもないように思われるのである。

八月十五日の朝と夜

—あさ九時ごろ、何気なくテレビのスイッチをひねった。Tさんがとつぜん、ようと部屋へ入ってくるまで気付かず、ぼくはフトンの上に起き上りかけたまま坐つて画面に見入つて、泣いていた。そして一日中その余韻がのこっているようだった。

夜は、東大阪市民会館でひらかれた八八・一五とは何かを考える集会Vにでかけた。二十人ほどだったので、年令順にみんながひとりひとり話した。そこでぼくはこんなことをしゃべった。

「——この日だけ戦争を思い出すのはナンセンスという言い方もあるが、ふだんほとんど忘れてるぼくにとつて、八月一五日はおろそかにできない。そしてやはり、いろいろと考えさせられる日だ。」

今朝のテレビで、新婚三日目に夫と訣れたきりという戦争未亡人Y子さんがうつっていた。はじめ彼女がひらいている洋裁教室のはなやかな風景と、てきばきした

授業ぶりが出て、それから奥座敷でインタビューと話をしていくところになった。

彼女はまだ四十なかばに見える若々しきで、おどろくほど明るかった。とても戦後の二十九年間、ひとりで夫を待ちながら、苦勞して学校をつくりあげてきた人のようにみえなかった。そして話が戦死した夫のことになると、言葉づかいは急にあどけなくなった。

はにかみながら、質問にひとつひとつこたえおわってすこし首をかしげてこちらをまっすぐにみる表情は、若妻のように初々しく、可憐だった。

と、まじまじとこちらをみた。それから、とつぜん絶句して、大粒の涙をみるみるあふれさせ、はげしくすすり泣いた。

「もう……聞かないでほしいの……。だまってはしいの……。信夫さんは、死んではいない……。信夫さんに、わたし、逢ったことがあるの……。まいにち夢でみるのよ……。光基地へ戻ってきたというしらせがきて、あわてて着がえなどバックにつめて、大いそぎで面会にいこうとして、そこで目がさめたり。切符がとれなくて、どうしようどうしようと思つて目がさめたり。なかなかあえないの。でも十年前一度だけ出会えた。光基

地の裏山の、壕のくらがりのようなところで、——すぐ出ていく——というのを見送ったの……。うれしかった……。だから、きつとまた帰ってくるわ。あえるわ。きつと会えるのよ……」

それからテレビは、Y子さんをその光基地まで同行して、小さな神社がある裏山を訪ねてあるく姿をうつした。一本の松の木のそばへかけよると、Y子さんはその幹に手をふれた。それからしだいによりよう手でかゝえるようにして身をよせた。

二十九年まえもそのようにしてY子さんは佇っていた。人間魚雷となつた夫をのせて、伊号潜水艦はゆっくりと沖合を遠ざかっていった。

「そして、見えなくなったの……。もういくら見ても……。見えないの——」と言つて、息をつめて泣きじゃくつた。

日常の社会では、五十代の分別と立派な才覚をもつY子さんが、そのときはまるでその当時二四才のういういしい新妻そのものだった。しぐさも声も表情も、そのすべてがうたがいもなく二九年前のY子さんになり、だしかに、まだ死んだのではない夫を、見送っているのだ……

テレビの画面に吸いよせられながら、ぼくは、そのY子さんというより、Y子さんにあらわれたおんなの性の男どもには思いも及ばぬ愛のすがたの底知れぬ深さ、一図なもの大きさに、たゞたゞ茫然として、ぬかつかんばかりだった。

そのようなおんなたちのおもいの、たゞひたむきなものの、果して世の男どもはどのように、応えてきただろうか。ぼく自身かえりみて言葉もない。

否、それどころか男たちは、この至上のものを、むしろ取りまつわるものとして捨て去ることをいさぎよしとした。国家社会の危急を論じ、戦争をおこし、勇んで戦地に赴くことで、このように深くひたすらなおもいを、容易に切り捨ててかえりみなかった。

それゆえに、戦争のもっともむごたらしくひどい受難者は、死んでいった男たち以上に、まさしく女たちだった。あとにのこされた女やかかわい子供たちであった。

そしてこんどまたあのような戦争がおこったら——もし徴兵されたり、戦地へ赴くというようなことが出てきたら——男どもはまたくりかえし女たちに、同じ嘆きと苦しみを与えてかえりみない——ということになるのだろうか。いや、もうそんなことは二度とくりかえさぬ——と心に

銘ずるとしても、周囲の状況が依然としてかわらないとしたら、ぼくらは一体どうしたらよいのか……

(ぼく自身のこととして考えれば、もう年令的に徴兵されることもなからう。しかし銃後での戦争協力にひきこまれることは避けがたい。とするならば……)

——そこでA君が、ぼくにきいた。

「では、たとえばもう一度、あなたがやり直すとしたら……」

——それはいうまでもなく、Y子さんのおもいに、どのようにつくしても充分でないと、ぼくの全身をもつて、過去、未来、永劫に應えつづけるということ——たゞそのことだけだろう。

ぼくはテレビでY子さんをみたとき、もはやすべての男たちは、彼女のまえにひざまずいて顔をあげえない、と思った。まして戦地へ、彼女をおいてゆくなどのことは、どんな状況に迫られても許されることではない、と思った。どんなことをしてでも、である。

そのことは、たゞひとつのことを何よりも明らかにする。すなわち、男たちは正義とか反戦とかまたは大勢に従って国に殉ずるのではなく、たゞ一図に女にこそ殉ずる——ということ、それである。

もつとさくばらんに言えば、そのときぼくは男々しくでなく、精一ぱい力をつくして女々しく生きられるだけ生きのびるために努力をつくす。つまりぼくの最愛の女性と、手を取りあって戦争からにげる。それをとても世間が許さぬとあれば、何もかもすてて駆落ちをする。逃げて逃げてそれでも、もうダメというときは、心中しなっていた。そのことはまた、男たちは女性の力にたすけられて、たとえ死ぬとも戦争反対をつらぬくということでもある。(サルートン通信一六八号より)

3 いま現在のためのWR I

しかし——戦争がおこったそのときは——という明日に、いま問題があるのではない。それだからこそ、いま現在どうするのか、明日以上の切実さで考えられねばならない。

そして、たとえ疑似的にせよ「いまは平和」とよばれ「戦争は悪」が当然のこととして通用しているとき、まず何より反戦に焦点をあてた運動を、けん命に展開しなければならぬだろう。

しかも戦争は、「平和」と呼ばれているときも、たえずあらゆるかたちをとって行われている。戦闘は戦争の

表面に突出したひとつの現象にすぎず、それはいつ身近かな身辺にあらわれるかもしれない。

それを果してどのようにとらめようかどうか。もちろん個人の決意や力でもってしては、ほとんど不可能といってよい。組織的な各分野にわたる運動の連合した大きな力と、その発展がつくりだすもの、その巨視的展望以外にはないだろう。

それにしても数年前まで、ぼくらはベトナム戦争反対の大きな流れのなかにあった。そして、デモで米大使館をとりまいたり、戦車輸送トラックの前に坐り込んだりした。

その一方でぼくらはまた、その日々の労働として、たとえば工場で関連軍需品の製品をつくり、それを商品として売買する企業で働き、また輸送するトラックを何知らず動かすという大きな矛盾を、やむをえない当然のこととしてやってきた——ということがあった。

私たちのベトナム反戦運動が、あれほど大きく盛りあがったにもかかわらず、日本政府の態度をついに変えることができなかった——ということの一つの主な理由は、このように戦争に対して、運動(組織)と個人が背反隔離していたことにある。

そしてそのことを、運動が發展しないかぎりはいう言い訳で、戦争に対する個人の努力や責任を切り放し、軍需産業で収入を得るという矛盾と背反をやむなしとしてよい、ということには、決してならないだろう。しかし問題は、そのことをいくら明らかにしたとしても、現実的にはどうにもならない私たちの人間的な弱さとしてある、という事実である。

まえの戦争体験をかえりみて、ぼくがたどりついたところは、まずそのことをどう自分の問題とするかということであった。そのようなぼくの弱さがある一点で、どうしても歯止めするために必要なものとして、たまたまそのとき出合ったのがW R I宣言の一章「私は……軍隊のどのような部署にもつかず、兵器や戦争用資材を製造したり取扱う職業につかないことを決意する……」であった。

現代の産業は、あらゆることで軍事に関連し、またすぐ転化する可能性をもっている。(ベトナム戦争当時、アンネも軍需調達品であった)ある日自分の仕事先がそうであると判ったとき——たとえ明日の生計見込みがないとしても——その勤めをたどちにやめることができるか。ぼくには全く自信がなかった。そして疑似平和状況のな

かで、知らず知らず戦争協力へのめりこんでいくそんなぼくの日常を、その最後の一点で立止らせるものとして、W R I宣言は何よりも重要なA歯止めVの役割を果たすものだった。その一事のふんぎりのためにも、また、まずいま現在においてのぼくの反戦をはじめのオ一步としてでも、W R Iメンバーとなることは、ぼく個人にとって必要不可欠とおもわれたのである。

4 W R I と ぼ く

そのころぼくは、船用その他のくさを生産する企業組合に勤めて、その責任者だった。

ベトナム戦争が激化しつつあった六八年の十月ごろ、ある朝出勤早々机の上におかれてあった書類を手にしてぼくはガクゼンとした。横浜米軍の物資調達局から入札指名の文書である。それによれば「貴社製品は仲介業者によってすでに納入されているが、需要拡大に伴い今後直接取引をしたい。所定の手続で応需ねがいたい。」というのであった。その書類を黙殺破棄しながら、オ一にぼくの頭にうかんだのはW R Iのことであった。

それよりすこしまえ、一九六七年十月十三日、ベ平連がハインツレビッド号の四人の脱走米兵Vについて声明

を出し、それ以後いわゆるJ A T E Cの活動がはじまった。まるで符節をあわせたようだったが、その一ヶ月ほど前、ぼくは個人紙Aイオム通信Vと長野のA三文評論V紙に「W R Iの一会員として—小さな宣言」という小文を書いて仲間や友人に送付した。

その要旨は —

「・・・ぼくは約十年前、戦争抵抗者インターナショナルA
—略称W R I Vに個人として参加し、いまでも引続いて会
員です。」

W R Iの設立(一九二一年)当初からの主要な役割りは、(イ)O・O(良心的兵役拒否者)の法的闘争の援助、
激励、(ロ)軍隊からの逃亡の勧誘と保護、(ハ)収容所、
牢獄、キャンプ等にいる仲間の慰問、救出、亡命のための
活動、等がはつきりとかかげられてあり、ぼくはその
ことを心にきざんで加盟したのでした。

W R I日本部は、アメリカやヨーロッパ諸国のグルー
プのような、組織機構をもたず、残念ながら、ほとんど
何の力をも、いざというとき發揮できません。—だが、
それだから、どうしようもない・・・として、ぼくは又
もや金東希氏の事件のように、この次も、うかうかと思

送ってしまうことが許されるでしょうか。そして—本當
に、どうしようもないことであるのか、どうか—

ぼくは、いま、自分にこのことを問う—正直なところ
もし万一そのようなことが起ったならどうするか、その
責任の重さや、家族(—といっても子供たちと老母)のこ
となど考えて—胸をすこしドキキさせながら、以下の
ことを宣言します。どうかぼくのこの「ちっぽけな宣言
」をおぼえておいて下さい。そしてあなたに心当りのあ
る事件が出てきたとき、具体的な形でぼくにおしらせ下
さい・・・」

—ところが、そのことをやりとおそうするとき—た
とえばその彼と共同運命をせおうなどと言うことは、勤
めをしいてはともやれないということが、そのころ
のぼくの実感として痛切だった。

それやこれや—それだけでないいろいろな事情もふく
めて—さんさん迷ったあげく、やっとぼくがくさり組合
を退職したのは、それから二ヶ月後の十二月だった。

そして、ぼく自身がW R Iのメンバーであることの自
覚、曲りなりにもW R Iにつながっているという実感を
多少でも持ったのは、加盟して十余年もたった実にこの
ころから、と言ってよいだろう。

実際、年額千円ほどの会費を英国へ送金し、その見返りに速いヨーロッパ中心の反戦活動ニュースを時々うけとるだけということでは、加盟していてもいなくても、全く変りはなかった。そしてまたその時まで、ぼくの意識のなかで、W R I 宣言やその任務は文章として存在していて、ほとんど、日常生活のなかで眠っていたといえる。また、誰も引き受け手がなかったせいもあってぼくは一応 W R I 日本 の書記ということになっていたものの、それはたゞ国際事務局の連絡文書をうけとるだけという、かたちだけのものだったのである。

5 国際平和行進のこと

一九六四年、メノンとクマールという二人のインド青年が W R I 会員としてやってきた。彼らは二年前、ニューデリーを出発して、モスコ・ワシントンを訪ね、原水爆の禁止を訴えて、全行程一万キロを徒歩で歩いて、最後のコースに日本の東京―広島をえらんだのであった。国際平和行進と銘うったそれは、日本での飛入り参加もふくめて一行六名、東京からの一千キロを野宿覚悟で歩くという。もちろん無一文。誰といって頼るほどの組織も有力者もない。

そこで W R I 日本は、と言うより、アナキスト連盟の一部有志が、非暴力をかうげるグループによびかけて十数人の協力委をつくったが、東京―名古屋ぐらゐまでの仲間が点在する地区の世話が出来ても、それ以上は無理であった。そのような事情のなかで、ぼくは岐阜県大垣から岡山までの区間、(そこから先は岡山―三原―広島の間が世話をするようになった)ともかく一行の受入れ、通過、宿泊、送り出しについてのアレンジを受けつた。もちろん、あてがあったわけではない。(だから、知らぬ土地十数日の宿泊場所を縁故や知己をたどって、ともかくめどをつけておくことはとても大へんなことだった)

それはともかく、この国際平和行進は、その後のぼく自身を大きく変え、ぼくにとっては生涯忘れられぬものとなった。

第一に、彼らとほとんど一緒に一日のうち十時間内外約一ヶ月間行動をともにしたが、そのあいだ、ぼくは生まれてはじめてといってよい程、自分の力のありつたけをつくした。たとえば、午前八時勤め先きへ出勤、一日分の仕事を手配して十時半の汽車にとびのる。午後一時まえ醒ケ井下車。その日の早朝、大垣を出た一行を待ち

うけて合流、徒歩で約十五キロを歩いて五時ごろ長浜着。かねて依頼した宿舍提供先、長浜教会で夕食。七時から座談会。夜半十時長浜発姫路へ。車中で各地への報告と連絡の手紙十数通を書いたあと、八行進ニュースV（これは日々近づいてくる行進の胎動を各地へ毎日つたえてその高まりをつくり出し、三七号の終刊までに多数の行進支持者を生む役割を果たした。）の原稿をメモし、その發送用封筒のあて名書きをすまして午前一時ごろ姫路着。

それからニュースのガリ切り、印刷、封入。四時すぎ就寝といった日課を連日つづけた。いまおもえば、われながら気遣いじみたことであつたが、その経験は、ぼくに「なんでもやろうと思えば相当なことができる」という自信をつけさせた。そしてその時の実務的な事務処理の経験をもふくめて、その後のぼくのいろいろな活動をすすめる大きな力となった。

第二に、はじめこのような多くの活動を傍観していた女房が、夢中で協力しはじめることになった。「たのむから、私も出来ることをさせてほしい。そのあいだちょっとでも体をやすめたり睡眠をとってくれ」というわけである。そしてしまいには、三人の子供までが手伝いに加わり、行進が姫路を通過する前後は我が家が、かつて

ない一家団らんと、精神的に全く新しい質の一体感を共有することでもあった。そして、のちのちまでもそのことが語り草になり、そのたびに私たちは強い親和力で結びついていることを感じあった。それはまたぼくが、運動に疲れたり失望したりしたときも脱落することなく、持続できた大きな基盤であつた。

第三に、メノン、クマールらは行進中、あらゆる機会をとらえて三つのことを語りつづけた。八非政治—ノンポリテイカルV八非暴力直接行動—ノンバイオレンス・ダイレクトアクションV八個人責任—インディビジュアル・レスポンスビリティVの三つは、それ以降ぼくの思考と行動を新しい世界へとみちびくものとなった。とくに八非暴力直接行動Vは、ぼくがいまで見るのがしてきたものごとの本質を見出す根源のことばとなった。

（この三つは、七五年に核反対ヨット・フリー号が来日して、彼らの具体的な日常行為と活動のなかで、ことば以上のかたちで表現したものであった）

第四に—その行進では、具体的な一行の宿泊、休憩、食事、座談会などで、地方在住のアナキスト連盟員はもちろん、さまざまな人たちの協力と献身が生れた。そして自分の思想信条にかゝわず、異なった立場の人とも、

△連合Vすることの重要性、それが意味するものゝ無限の可能性とWRIの精神―他者に共同すること―を確信することになった。それは六五年以降大きく展開されはじめたベトナム反戦運動その他のなかでの、ぼくの姿勢の基盤をつくった。それ以来、ぼくは、自分の活動が他者の活動―運動にどのような意味や役割を果しうるか、その△自由連合Vを考えるようになった。

第五に、国際平和行進と銘うたにしても、たゞ数人がプラカードを持ってテクテク歩くだけにすぎない。とすればたとえば、権力をふくめた傍観者にとって、それはまるで無意味なものとも言えるだろう。(アナ連の一部で、ナンセンスという声もあった)

だからそこで△受入れ方の問題Vが、より明らかに出てこざるをえない。つまりぼくにとっては△自身の受けとめ方Vの問題であり、彼らの行為を媒介として、△何が自分にとっての問題かVであった。

しかし、半ばは成り行きで、ともかくぼくは、そこでありったけの力をつくそうとした。そしてそのことは、△対応の仕方が自分を変えるVという、大きな発見となった。

さらに他者の行為から学んだり受けとめるということ

は、むしろ他者のそれを媒介にして、自分でつくり出すものであり、そのことの受けとめである、という何にもまして得がたい具体的教訓を知覚することであった。

6 WRI その自由連合

このようにしてWRIはぼくにとって、はじめ、ほとんど組織として表にあらわれず眼にも見えないものであった。が、しだいに自身の内部に、いつも密着して存在するものとなった。

そして―自分が何となく刺激を失ってぼんやりしたり、打ちひしがれているとき、または運動が沈滞して、仲間たちがつきつき周辺から立去っていくとき、とつぜんのように、自分がその会員であるものとして、WRIがよみがえった。そしてそのときたゞひとりであらうとも、ぼくがWRIメンバーだというとき、視野のなかに見失っていた未知の運動や大勢の仲間が、いくつもたしかに見えてきた。

またそれは、WRIが組織以上の組織として―いままでの組織概念では規定することのできない―可視・不可視の領域にわたる△自由連合Vの組織として、まさしく存在し機能するものであることを、明らかに意味するものであった。

反公害住民ひろば

「一つの地域において生じた問題

は、その地域にのみとよまることなく広がる。」それは「単に私達の地域から企業を追い出すだけではダメなのであり、さらに、各地住民との密な連絡のもと、公害企業の操業を全ての地域で許さない闘いが必要」だ。この認識から「反公害住民ひろばV（大阪市北区神山町一三・松栄ビル三F）が生まれた。

「ひろばVの目的は次の三つに集約される。

- ①各団体のかゝっている現状の告発
- ②団体間相互の交流
- ③ひろばを通じて運動を担う新しい

層の獲得（拡大）である。

そして、それをやる過程を重視し「ひろばVで交わされた内容、各団体のかゝえる問題点、集会等を知らせる場として「ひろば通信」を発行した。その内容は、三里塚、みなまた、ビワ湖、関西新空港、多奈二等々と、正に百りよう乱の多様さである。

ところで、「ひろばVの目的を考えるとき、僕は最も②の団体相互の『交流』を重視したい。

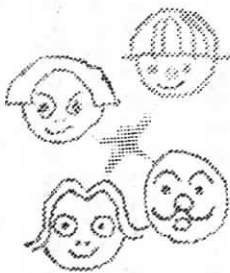
現代社会の矛盾は、実に無数の問題をその内部にはらんでいる。それ故、僕等が、その運動の総てに関わ

ることは不可能である。その時、その運動の切迫性と、自己の問題関心によって僕等は行動を選択せざるを得ない。

この、いわゆる助っ人をスムーズにならしめるのは、運動間の情報網であることはいうまでもない。

とするならば、諸運動の交差しあう「ひろばV」とは、本質的に「人助け」人体制Vを志向しているのではないだろうか。それはまた、小状況から大状況へ、大状況から小状況への結節点でもある。

（笠田）



ウリの歴史



W R I はウリと読み、戦争抵抗者インターナショナルの略称である。第一次大戦が終った直後、戦時中反戦運動のために弾圧迫害をうけたヨーロッパ各国の人々が、オランダに集った。その結果、イギリス、フランス、ドイツ、オランダの団体が中心となり、首唱者ランハム・セラウンを代表とする「バーツォV」(エスベラント語「平和の意味」という国際組織が生まれた。セラウンは当時四二才、二十才の時イギリスの南ア戦争に反対して闘い、第一次大戦中も獄中で秘密の回覧新聞をつくって、最後まで反戦の闘いをやめなかった歴戦の闘士であった。

一九二三年三月改組されて名称をW R I と改め、事務局はイギリスに移った。二五年、イギリス・ホッテストンではじめて国際会議がひらかれ、世界各地から九十名の代表が出席、評議員会が選出された。それ以

来、三年毎に国際会議が継続して開かれ、昨年はアムステルダムでその第十五回が開かれている。国際事務所は、昨年ロンドンから移り、現在ベルギー・ブラッセルにある。

日本におけるW R I は、戦時中会員イシガオサムさんの兵役拒否が知られているが、一九五三年アナキスト連盟国際部責任者であった故山鹿泰治によって、はじめてW R I 日本がつくられ、原水禁運動を中心に活動をはじめた。インドで開かれた第十回国際会議、(六十年)には代表を初めて送っている。山鹿死後、速藤、向井と書記がひきつがれ、機関紙「戦争抵抗者」を十五号まで出したが中絶。ベトナム反戦、七十年安保闘争をへて、七四年、核反対ヨット・フリー号の来日などにより、再組織と活動がはじまった。機関紙「非暴力直接行動V」が十号まで発行され、ニュースレターと改称されて現在に至っている。

